



Title	サン=テグジュペリの生命・意識論と地球環境の危機
Author(s)	高實, 康稔
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1996, 37(1), p.55-62
Issue Date	1996-07-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/15364">http://hdl.handle.net/10069/15364</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T10:14:40Z

## サン＝テグジュペリの生命・意識論と地球環境の危機

高 實 康 稔

### La «Conscience» de Saint-Exupéry et la Crise de l'Environnement de la Terre

Yasunori TAKAZANE

サン＝テグジュペリは戦争への嫌悪感と戦後世界への危惧を残して消息を絶った。彼は反戦論者ではなかったが、戦争と平和の問題は文明の進歩という概念の成否にかかわる問題として、最後まで彼を悩ませた。戦後世界は物質文明に傾斜を深めていくに違いないという予感も、精神文明の進化を脅かすものとして彼の危機感を募らせた。一方、彼は生命のエントロピー抑制作用に着目して、生命と文明の進化の根幹にかかわるものとして「意識」なる概念を提起し、「意識」のもつ創造的方向性に限りない信頼を寄せてもいた。未来への危惧と希望はいわば拮抗していたといえよう<sup>1)</sup>。

戦後世界に対するサン＝テグジュペリの危惧は、資本主義と社会主義に共通する物質崇拜、形式的デモクラシーの墮落、政治的抑圧体制の深化などに向けられ、物質文明の必然的方向である生産と消費の無分別な拡大、資源の爆発的な大量消費、経済的利益優先の自然開発に起因する地球環境の危機といった問題にまでは及んでいない。しかし、敵と味方を問わず戦争ほど環境のエントロピーを増大させるものはないであろうし、物質文明の退廃がもたらすエントロピーの増大を抑制する「意識」の役割と、エントロピーの増大に対する人類の自覚の決定的な重要性を説いたサン＝テグジュペリの先見性は高く評価されるべきであろう。現代の地球環境の危機は、彼の言う「意識」の流れに逆行した反生命的な人間活動の結果に外ならないからである。

文明の進歩の信奉者であるサン＝テグジュペリは、また、文明史上における非情な試練の介在を避けられないものとしていた。現代の地球環境の危機も、試行錯誤としての試練といえるのかも知れない。しかし、生物の生存すら脅かすに至ったその危機的状況はまさに楽観を許さない段階に達しており、私たちは一刻も早く安全かつ定常的な自然環境を回復する必要に迫られている。そして、そのためには、便利さに偏した人間の生活水準も高度に発達した科学技術の使用も抑制的な方向へ転換されなければ

ばならないことは論をまたないところである。本稿では、こうした地球環境の危機という視点から、サン＝テグジュペリの〈意識〉論および「エントロピー論」の検証を試みることにしたい。

## I 「エントロピー」への着目と「自然の意思」

サン＝テグジュペリの「エントロピー論」は、「エントロピーの勝利に対する抵抗」(IV-78)<sup>2)</sup>としての生命への感歎と人間性回復への希望から出発している。

すべての生命は本来、エントロピー増大を抑制しながらある安定した恒常的な状態を維持する存在として自然界に生まれてきたのにも拘わらず、人間という生命の活動は、彼の時代に至って生命と伝統的文化の破壊をほしのままにする絶望的な状況に陥り、自ら世界のエントロピーを増大させるという明らかに反生命的な方向に転じた。とりわけ二度にわたる世界戦争によって未曾有の流血を招いた20世紀前半のこの暗黒の時代をいかにして平和な状態に復帰させるか、彼の意識と行動はこの難問の解決に集中的に注がれた。作家というよりは行動的哲学者・思想家であった彼の読書は幅広く、この苦悩の時期(30年代後半)に彼はエディントンの書に出会い<sup>3)</sup>、この天文学者の生命観とエントロピーなる熱力学の法則に着目したものと思われる。「ほくは彼の考えに助けられている」(III-114)と記すとともに、「物理学者と同じように、詩人も無益な存在ではない。両者ともにいくつかの真理を検証するが、詩人の検証する真理はより切迫したものである。なぜなら、詩人自身の意識が問題だからである」(同上)と、詩人としての差し迫った自己の役割を再認識している。「生命とは(中略)冬でも火を輝かせ、夏でも氷を作らせるものだ」というエディントンの言葉が「手帖」の中に二度出てくるが、この言葉に衝撃的な感銘を受けたといえよう。生命は統計学や物理学の一般法則に反して「もっとも蓋然性の少ない状態を実現する過程である」<sup>4)</sup>(IV-80)ことに、彼は以後さまざまな思索をめぐらせることになる。ひとたび誕生した生命には統計学や物理学では未だ完全には説明のつかない恒常性があり、「かくして、その混沌とした生成に、意識が恒常的ななにかを導入したのである」(IV-75)と、「生命と意識の同一性」の概念にほどなく到達するのであるが、生命の恒常性から「エントロピーの勝利に対する抵抗」という生命観を導き出した斬新さに驚かされる。

このような生命の特質はそれを与えたものの意思に適っているはずであるから、生命の出現とその恒常性をもたらしたその根源的なものを科学者の表面的な解説にみられる「偶然」<sup>5)</sup>に求めるのではなく、彼はそれを〈意識〉と名づけ、必然的に「生命と意識の同一性」という結論に達したのである。さらにはこの〈意識〉は、生命と同

一であるが故に人間を含むすべての生物の根底にあり、人間の意識も本来はこの〈意識〉の支配下にあるという〈意識〉論と、人間の意識への根本的な信頼という思想を形成するに至った。

ここで意識なる語の多義性と観念性を指摘することは容易であろう。また、「創造は論理のなかにあるのではない」(IV-118)としても、〈意識〉のあいまいさは拭いきれないであろう。しかし、この〈意識〉を「自然」と置き換えてみることは、あなたがちサン＝テグジュペリの思想に反することではないと思われる。「自然法則下での生命の形成過程が、はくの研究課題であり続けるわけである」(IV-38)とか、「かりに、はくが人びとに死を受け入れさせる言語(ヒトラー)を作り出すとしても、はくは自然に反しているわけではない。自然はそれを受け入れる」(IV-163)とあるように、ここでの「自然」は〈意識〉の代名詞とみることができる。確かに「自然」なる語には意識性が含まれないが、「自然の意思」という表現は一定の概念をもって一般に広く受け入れられており、「偶然」とはかけ離れている。生命も人間性も「自然」に依拠したものとして、それらを深く信頼することがサン＝テグジュペリの思想であり生き方であったといっても過言ではないであろう。

## II 「自然の意思」と科学

生命の出現に関して、科学は決して「偶然」で片づけているわけではない。それは表面的な解説にすぎず、生命の出現は生命維持の恒常性・必然性ほどには解明されていないにしても、今日の生化学では「生物の出現を育んだ地球環境は、太陽から宇宙空間へのエネルギーの流れにさらされて、非平衡な状態が保たれていた。生物の源は、その非平衡性によってもたらされた化学物質の散逸構造だと考えられる」<sup>6)</sup>としている。散逸構造とはプリゴジーン(ベルギーの物理学者・化学者)が名づけたもので、「熱平衡とはほど遠い状態にある非平衡系で現れる空間的パターンや時間的リズム」のことであり、地球は著しくこの散逸構造をもつが故に、彼は地球上の「生物の形態形成などもこれに結びつけることを試みている」<sup>7)</sup>という。

サン＝テグジュペリは生命の出現自体に対してよりも、生命の創造的・合目的な進化の謎により深い関心を抱いていたが、「生命と意識の同一性」という彼の〈意識〉概念をプリゴジーンのいう地球の散逸構造と結びつけて理解することはむしろ興味深いことであり、何ら矛盾を生じないばかりか、「自然の意思」としての〈意識〉をそこに見出すことができよう。

エントロピーの増大に抵抗する、自然界における生命の非平衡性についてのみならず、〈意識〉による生命の創造的進化についても、サン＝テグジュペリは感嘆すべき

多くの思索を残した。この点に関して、科学は次のように解説する。

生物は環境に影響を及ぼし、それによる環境の変化は太陽から宇宙空間へのエネルギーの流れに変化を与え、それがふたたび生物構造と環境への変化を招来する。進化のフィードバック回路が形成されたのである。しかも、生物構造の情報はDNA内に記号として定着保存されていくので、しだいに複雑化が可能になり、一方向的な進化が実現されることになる。正のフィードバックである。<sup>8)</sup>

これがもし実証可能な真理であるならば、「樹木の形成過程を種子の化学的決定論と環境の作用の相関関係によってのみ説明すべきだ」(IV-38)としたサン＝テグジュペリの見解は科学的根拠を得たことになるとともに、「存在するものが過去の状態よりもより高度な組織をもつものになろうとするのは、どのようにしてであるのか」(同上)という彼を苦しめた難問に解答が与えられたことにもなるであろう。彼はこの難問を<意識>の介在によって解決しようと努めたのであったが、<意識>を「自然の意思」と解する限りにおいて、ここでも彼の思想は科学によって補強されこそすれ、科学と衝突することはなかったのである。ただ、「詩人の検証する真理はより切迫したものである」のにすぎない。「正のフィードバック」とはまさに詩人の「創造的進化」の科学的説明に外ならない。

さらに今日の科学は、「プリゴジンの散逸構造論によると、生物進化は連続的に一樣におこるのではなく、環境の変化がある程度蓄積すると急に進む、というように段階的である」<sup>9)</sup>という。このことはサン＝テグジュペリが苦悩のなかで指摘した文明史上の試練の介在を想起させずにはおかない。けだし、「Hとエントロピー。それが人類を再武装させる」(V-30)<sup>10)</sup>のである。もっとも、彼は文明の未来を信じてやまなかった反面、いかなる予測も不可能であるとして、創造的進化の実現のためにはそれを意識することが重要であるとも述べていることには注意を要する。いかなる予測も不可能である以上、これは一見矛盾した論理であるが、<意識>の流れの実現に努める進化への願望に、一定の役割と人間的な意味を与えようとするものである。従って、「今日の急激なエントロピー生成を、段階的進化で生じる不安定性の一つと見なすことも可能であろう」<sup>11)</sup>という科学的見解は、試練の介在という彼の思想の支えとなるのみならず、「しかし、その次の段階が人類や生物のいっそうの進化をもたらすという保障は何もない。生物の居住には不適なカンブリア紀以前の原始地球への回帰であるかもしれない。人類はいま、ギヤーの選択を誤らず、正しい方向へのフィードバック回路を選ばなければならないのである」<sup>12)</sup>というエントロピー増大に関する科学者の警告も、サン＝テグジュペリの本来二重構造的な<意識>概念と対立するもの

ではないのである。

### Ⅲ 《意識》概念と地球環境の危機

サン＝テグジュペリは人間とその社会の利己的な部分をも深く洞察していたが、戦後の世界についても決して楽観してはいなかった。「X将軍への手紙」によって明らかのように、「ドイツ問題が片づいた後に、真の問題がすべて問われてくる」<sup>13)</sup>ことを予感していた<sup>14)</sup>。物質文明に走る資本主義の側の退廃とみせかけの「自由」、人間管理を押し進める社会主義の側のみせかけの「進歩」などを危惧していたが、この手紙に「エントロピー」なる語は見られないまでも、戦死直前の執筆であることから、戦後世界の物質的、社会的エントロピーの増大を案じていたことは確実である。エントロピーは当時の彼の思索に重大な位置を占めていたからである。また、「手帖」においても、エントロピーの法則を社会論に適用し、進歩のためには「純粋に創造的諸行為」(Ⅳ-109)が必要であると記しており、彼が当時すでに社会的エントロピーという概念をも認識していたことを指摘しておきたい。

しかし、現代の地球環境が、物質文明の追求による急激な開発と生産・消費の拡大を主たる要因として、酸性雨、成層圏オゾンの減少、土壌浸食など、地球のエントロピーを定常的な状態に保つことが極めて危うい状況にまで悪化し、さらには絶えざる地域紛争・戦闘、飢餓、南北格差等によって社会的エントロピーも増大している状況を考えるとき、地球環境に関する限り、事態はサン＝テグジュペリの予感以上に深刻さを増しているといつて過言ではない<sup>15)</sup>。このままエントロピーの増大を放置しておくならば、生物多様性の喪失のみならず、人類の生存すら危険な状況に陥らざるを得ないという警告が既に各方面から発せられ、早急な対策が求められている<sup>16)</sup>。

生命自体も人間のいかなる活動もエントロピーを増大させることはもとより避けることはできないが、植物にせよ動物にせよ、生命の維持活動はそれによって生じた熱(低級なエネルギー)を赤外線として宇宙に放出することによって、自然界を低エントロピーの状態に保つことができる。人間の生産活動にしても宇宙に放出しきれないほど過度のエントロピーを生じさせない限り、地球は安全な定常状態を維持することができる。サン＝テグジュペリの言うように、この状態こそ「自然」が望んだ環境であった。しかし、現代の科学技術は明らかに「自然の意思」を超えて、自然界が分解しえない化学物質(例えばビニール)をも大量に作り出し、宇宙に放出されえないそれらの物質は地球上に残留し続ける結果となった。生命に有害なものも含め、その数は1千万種類にも及ぶという<sup>17)</sup>。これらの物質の製造と大量の排出物が、意識的にであれ無意識的にであれ、現代の人間の行為によるものであることだけは確かなこと

である。

地球は本来、「太陽ふく射の入射と地球熱ふく射の放出という形でのエネルギーの出入りはあるが、物質の出入りは無視できるほどわずかである」<sup>18)</sup>ので、熱力学的には閉鎖系であり、換言すれば太陽エネルギーの恵みによる外燃機関である。それにもかかわらず、化石燃料を急激にしかも大量に消費している現状は地球を内燃機関と化し、廃熱によって環境のエントロピーを著しく増大させている。人類は「いまや地下資源常用の中毒症状におちいつている」<sup>19)</sup>というべく、この行為は明らかに「自然の意思」に背くものであるから、方向転換を図らない限り後世に重大な禍根を残すことは必死である。私たちは分解不可能な物質の製造を中止することはもとより、あらゆる生産と消費の現状について再検討し、「自然の意思」に即して地球上のエントロピーを安全かつ定常的な状態に保つ明確な意識をもつ必要性和その対策に迫られている。

ファシズムの嵐と世界戦争という文明の危機に直面したサン＝テグジュペリが、「普遍的人間性 Homme」に全面的な信頼と期待を寄せて<意識>概念を確立し、物質文明から精神文明への転換の必要性を人々に語ったのは、エントロピーの増大に抵抗する生命の姿に人間の生き方の基準を求めたからであった。現代を生きる私たちが彼の<意識>概念を想起し、それに教訓を得ながら地球環境の危機の救済に取り組むことも精神文明への転換という彼の悲願に応えることであるに違いない。

## 註

- 1) 拙論「サン＝テグジュペリのエントロピー論」(長崎大学教養部紀要合併号, 1996) 参照。
- 2) カッコ内の数字は, ANTOINE DE SAINT-EXUPÉRY <CARNETS> (Gallimard, 1975) からの引用箇所を示す。ローマ数字は「手帖」の番号, アラビア数字は文章の番号である。本論文において以下同じ。なお, 訳文は同書の翻訳「手帖」(杉山毅訳, サン＝テグジュペリ著作集5, みすず書房, 1990)をそのまま用いた。翻訳者に心から感謝するとともに, 平明を旨とした苦心の翻訳に敬意を表するものである。  
なお, サン＝テグジュペリは「数百万年前から太陽がぼくたちに分け与えてきたあのエネルギー(石油, 石炭…)の跡をたどると…そのエネルギーの貯蔵を生みだしたものが生命であること, ただ生命のみであるということは意味のないことではない」(V-19)と, 生物のエントロピー抑制作用とエネルギー貯蔵能力について一種の感動をこめて記述しているが, これは植物の光合成や動物の生合成, 生体濃縮などについて, 彼が深い知識を有していたことを示すものであることを指摘しておきたい。
- 3) アインシュタインの一般相対性理論を日食観測で証明したことで有名なイギリスの天文学者エディントン A. S. Eddington (1882-1944) は, 「認識論から出発した物理学の基礎理論」(万有百科大事典16「物理 数学」小学館, 1979, 48頁)として「物理学の哲学」(1938)を著したが, サン＝テグジュペリは恐らくこの書を手にしたものと思われる。
- 4) この生命の形成過程は, 次節で述べるように, 地球の散逸構造と生命との関係に関する現代の物理化学的研究によれば, 「温度差という非平衡性を生物という物質構造の形成に転化する交差過程が存在しなければならぬ。それが生物熱機関であり, その主要部が光合成なのである」(小出昭一郎・我孫子誠也著「エントロピーとは何だろうか」岩波書店,

- 1990, 96頁)と解説されることになるのであろう。
- 5) シュレーディンガー E. Schrödinger (1887-1961) もモノー J. Monod (1910-1976) も、生命の出現と進化過程における突然変異の偶然性ととも、生命体の合目的的遺伝性(必然性)を生命の本質として学問的に解説している。例えば前者は突然変異に関して、「もしも一つの自然発生的な突然変異が種の進化の歩みの中での小さな一歩であるならば、或る変化が、有害なものが起こる危険を冒して、どちらかといえば偶然的なやり方で『試みられる』、そしてもし有害な変化であった場合には自動的に滅びてなくなってしまふ、というように考えられます」(「生命とは何か」岡小天・鎮目恭夫訳、岩波書店、1994、70頁)と解説し、後者は「生物という、きわめて保守的なシステムにたいして進化への道を開くきっかけを与えた基本的な出来事は、たんに微視的な偶然的なもので、それが目的論的な機能にどんな影響をもつかどうかには、まったく無関係なものであった。このような偶発事はそれぞれ特殊なもので、本質的に予見できないものであるが、それがひとたびDNAの構造のなかに書き込まれてしまうと、それからは機械的にきわめて忠実に複製されることになる。(中略) 純粋な偶然という国で生まれた偶発事が、必然の国、仮借なき確実性の国に入ってゆく」(「偶然と必然」渡辺格・村上光彦訳、みすず書房、1976、137頁)と解説する。しかし、モノーの次の一節はサン＝テグジュペリの「意識」概念が学問的にも単なる生氣論で片づけられるものでないことを逆説的に示しているといえよう。「細胞の活動および成長を制御している分子レベルのサイバネティック機構にかんして、われわれの知識はかなり進んでいるので、おそらく近いうちに発生についての解釈に寄与することになるであろう。(中略) 分子生物学の最近20年間の発達によって、神秘の領域は著しくせばまってしまい、生氣論者が何か推測できる広く開かれた領域としては、もはや主観性一すなわち意識自体一分野以外にはほとんど残されていない。この領域はさしあたり依然として「保留中」ではあるが、今日までやられてきたすべての領域におけると同様、この領域においても生氣論的推測はやはり不毛のものであることが判明するであろう」(前掲書32-33頁)。
  - 6) 前掲書「エントロピーとは何だろうか」137頁
  - 7) 同上書、94頁。なお、プリゴジーンは同書の紹介によれば「ロシア生まれのベルギーの物理学者で化学者でもある」。
  - 8) 同上書137-138頁
  - 9) 同上書138頁。なお、続けて次のように説明されている。「エントロピー生成の小さい状態で安定化しているが、環境の変化がある程度まで大きくなると、生物構造のエントロピー生成が増大してそれまでの構造は不安定となる。こうなると、環境の微弱な影響が生物構造に大きな変化を惹起し、もっとエントロピー生成の小さい別の安定状態へと移行していくのである。」
  - 10) Hとはヒトラーのことを指すと思われる。前掲拙論参照
  - 11) 12) 前掲書「エントロピーとは何だろうか」139頁
  - 13) UN SENS À LA VIE, Gallimard, 1956, p. 227
  - 14) 拙論「サン＝テグジュペリ『X将軍への手紙』の『特異性』について」(長崎大学教養部紀要、人文科学篇、第33巻、第2号、1993)参照
  - 15) 学術審議会から文相に当たった「建議」(1995)を例にとれば、地球環境の現状を次のように概観している。「現在、人類は未曾有の速度でその活動を増大させている。先進国を中心とした長期にわたる経済成長とそれに伴う資源・エネルギー消費や排出物の急増、そして発展途上国を中心とした人口の急激な増加とそれに伴う生活圏の拡大である。このような文明の発展による人間活動の増大によって、環境に対する負荷が地球規模で急激に増加している。その結果、人間は今、大気中の温室効果ガスの増加、成層圏オゾンの減少、酸性雨、土壌浸食、森林の減少、生物多様性の喪失、砂漠化、地球全体あるいは地球上の広範な地域で同時に進行する様々な環境問題に直面している。」
  - 16) 例えば同上の「建議」は、「この問題は、人間活動と地球環境の相互関係の諸側面に広く目を向けた総合的な研究によって初めて解明され、解決の方向に向かうものであることを銘記する必要がある。このような地球環境問題の特性を踏まえ、その解決に向けて取組を



進めるためには、従来の取組みに加えて、新たな発想と視点の下に、人文科学、社会科学から自然科学までの幅広い学術研究を地球環境問題の解決を軸に据えて総合化することによって、地球環境科学という新たな問題解決型の総合科学を速やかに構築することが求められている」と、早急な対応策の必要性を訴えている。

- 17) この事実は後藤信行氏（長崎大学教養部物理学教授）の教示によるものである。本稿の執筆に際し氏にいろいろと解説を乞うた。感謝に堪えない。
- 18) 前掲書「エントロピーとは何だろうか」85頁
- 19) 同上書66頁

（1996年4月30日受理）